## 第**1**章

捨子花

Second Encounter: Falling

in the sky

吐き気がまた襲ってきた。私の立つこ イとか」

の大地、いや、地球そのものがシーソー

れている、そんな感覚。だから私は、そ に乗っけられて、ぐわんぐわんと揺らさ

してやりたかったが、残念、時間切れだ。 の先で無邪気に飛び跳ねる元凶を叩き潰

「また『発作』か? 今度はどんな死に

私の雇用主、末巫冬姫は、学校の先生の 方をしたんだ? 私は」

ように、詳細なレポートを要求する。 「首吊り。ちょうどそこにあるドアノブ

た。天井には体重を支えられるものはな みたいなのに縄を括って、胡座をかいて

かったみたい」

「自殺か? 思い当たる節はないが

「もしかしたら別の可能性……窒息プレ

「私はそんな悪趣味な人間じゃないよ」

なんて悪趣味な人間が宣う。

似合わない。喫茶店をそのままに利用 普通の人間に、この空気の漂う部屋は

たこの事務所は、本来シックな雰囲気を 持つべきなのだが、完全にそれを放棄し

いずれ。ここにいると、記憶が曖昧にな

ちも点だ。

て最後に、

私がここにいること。

詳細は

わっただけだから。

遠目で見れば、

どつ

ている。 られ、 な洋書や和綴の古書が無造作に積み上げ だったのに、今では魔女の館だ。怪しげ にでも乗っていそうな、 その中から選抜されたものだけが、 私の第一印象は、どこかの女性誌 おしゃれな建物 ようだ。 りやすいから。 女は私の予言への緒を見つけてしまった せた後、 数枚の紙を整理したところで、彼 私の頭の悪い冗談を笑って済

配列は一週間も保たない。だがここまで とも、この配置は彼女の気まぐれで、同じ 本棚という安寧を与えられている。 もっ 「ああ 「なにそれ」 通帳のコピー」 これは、 不味いな」

ここで死んだ。債務に押し潰されたのだ。 いるんだ。まずはじめに、前オーナーは 二つ目に、彼女が住み着いたこと。 もっと根源的なところに根付い 端的に言って、ここは呪われて そし らない。だってゼロが二つから四つに変 彼女にとっては、百も一万も対して変わ に。 の数字嫌いを思い出して、口をつぐんだ。 ったら、前もって知っているはずだろう 私は指摘しようとしたけれど、彼女

ている。

問題は、

は単なる、ずぼらな読書家の凡例だろう。

用があって印刷したのだという。だ

ろうに、そのへんの危機感がやはり金銭 定した収入は端から期待できない職種だ 焦っていた。個人の探偵事務所なんて、安 危機を目の前にした彼女は、目に見えて

欠点の一つ。私は、 欠落した金銭感覚は、 反面教師にしないと。 彼女の数多くの を出たあと、 暗 11

るぐらい、魔術師にとってはどうでもい ちょっとガスと電気と水道が使えなくな みたいなものだった。 そのけがあることは自覚している。 見れば残高の額は、 いわゆる破綻寸前。 小学生のお小遣い

> 母校に立ち寄った。 顔で絶望する冬姫を置 私は散歩がてらに懐かし い て事 務 所

古い光に人間たちは時の流れを背負って の中から、ただ一人を見分けなければな に、無表情にただ前へと進む諸々。私はそ 帰路につく。 気怠い顔に、 はしゃぐ集団

暮れは各々を赤く染めて、紅い、もっとも

と下校する中学生たちの姿が見える。

時刻はもう午後四時を過ぎ、

チラホ

いこと。と、

以前豪語していたが、

実際

が普通なのだが、 自己主張をしなくなる。 の雰囲気はすこぶる平凡で、 人混みの中ではすぐに これが少し反抗 まあ、 それ

らない。しかも、これが厄介なことに彼

的で、 なおかつ非行な少年だったら、 多少なり

感覚とともに、彼女から欠落していた。ま 確かに出来るのかもしれない。

雨水をサイダーにぐらい、簡単だろう。

毛は不自然な茶色に塗れて、

た画 な身長の波から、 という発想がない。だからこの似たよう 根は真面目なので、そもそも彼には染髪 とも見つけやすくなるのだが、 的な髪型の陳列から、 校則によって規定され 彼を見極め いたって いい ように改心して、 腹の中がお似合いだろう。 離施設だということ。 物達の溜まり場。 のだが。 ……己を鑑みれば、 人々のために働け 社会からの体 だったら、 いつかヨ の 無理 怪 い ħ ナ 獣 い ば Ó

0) 隔

は れる脈の流出元をたどって見れば、 になってしまうのだ。 る眼光は、 校庭を囲む垣根を回って、たらたら漏 日の始まりに彼らが入る、化物の 腸はられた 自然と険しく、 人払いのそれ 全て 話だろう。 私は哲学者でも思想家でも、ソフィスト さて、いらない考えはここで捨てよう。

今でも覚えているぐらい単純な事柄が一 ない日々に感じたことは少なく、 行便の改札口に行き着く。自分自身に かと言って恨みつらみの類もない。何 あそこは人の心もわかり合えない怪 中学生時代のいい思い出はない ただ めて、 てくる。だったら、 すいものだからだ。 て無視しても、 付着する信用は、 のない私だけの私。 たった一人の人間。 でもない。ただ少し頭の悪い、この世界で 外交用の笑顔を作る。 いずれそれは自分に帰 いとも簡単に剥が 他人とは違う、 無理にでも口角を上 たとえ無関係と断 だから険しい顔は つの 重 体に れ Þ 複

が、

あまり、

も

直

彼は言った。

る鉄則だろう。 げておくべきなのは、 誰だって理解でき れはその時の緩衝材みたいなもの。 「しょうがないよ。だって、綺麗なんだ

たからだ。 なぜなら彼は、ちょうど友達と一緒だっ

もん」

「 何 ?

なんか言った」

「なんにも」

友人達とはすぐに別れることになった。

白状すると聞こえていたが、

私は聞き流

を振って、わかりやすい媚びを私に売る。 左に曲がったからだ。三人組は大きく手 信号を渡って、私達二人は右に、彼らは 「お姉ちゃんのこと好きみたい」

> は近いし、異性を意識するのも当たり前 まだ中学生だが、もう中学生だ。思春期 すふりをした。恥ずかしさと少々の驚き。

るんだ。大抵の場合、性に合わないことを 口調がつい男性的になる。たまにこうな 「ガキのくせに、おませさんな奴らだな」 は大声で。 方もこそばゆい。 のなのだろうか。 ある人間に対して、そんな感情を抱くも か。だからって、もう何年も付き合い 羞恥に縮む声は、 共感性羞恥。 ごまかし

聞く

なんとか不時着しようとするのだが、こ 言ってしまったとき、語尾を変形させて 「そういえばさあ、 小鳥はどうなの」

「何が」

「恋人」 そ、そんなの」

## 就寝

では眩しすぎる私の目には、あの大きな 月明かりだけが、 私の頼りだった。電球 が泳いでしまう。ガラスの向こう側、真っ

た。

照明の、

しかし淡い光がちょうど良かっ

暗で光の積もる町の俯瞰へと。

注意を切り替える。 ほんのちっぽけな自尊心だ。 拘束されたように

とない指でも墜ちていくだろう。それ

は

動こうとしない足に、今日もまた落胆し

想像するよりずっと難しい。だからまた目 とする。眠たくもない目を閉じることは 私は区切りにならない眠りに入ろう

いるみたいに。もしかしてあの月は、 うとしている。まるで私の合図を待って 拡張された青白い月が、 きく見える。現実にはありえないほどに そしてここではどうしてか、月が大 町を押しつぶそ 中 もなかった。例えるならそう、子供部屋 しておどろおどろしい魔境というわけで は、 のかを教えてくれる。けれど、そこは決 のっぺりと張り付く壁紙のような風景 一目でココがどれだけ異質な場所な

空でピアノ線に固定されていて、後はほ んの一突きでもすれば、 私の細長く心も に飢えている子供達を、満足させるため のような雰囲気。 ありとあらゆる『体験

平 ぽつりと輝く星達は、 工の光に飲まれながらも、 空は恐怖を覚えさせてくれる。そして人 に 野は好奇心を掻き立て、 誂 えられた世界。 延々と広がる文明 理由のない希望を 果てのない夜 懸命にぽつり 体は、

与えて、安らかな眠りを誘う。 そんな景色を一望する丘の上に立つ、大

きな洋風の屋敷が私の住処だった。 私の部屋は壁の一面がガラス張りになっ

せるようになっている。

ていて、

綺麗な夜景をその隅々まで見渡

は呼んでいる。 周 だからここを『展望台』と街の人たち りは代わり映えのない規範的 な住 居

の ボ 奪い取ったのだから。そんな体で町に のないことだった。日に日に弱ってい だけど、そんなことはもう私には関係 ルとなるのも理解できなくはなかった。 ついに立ち上がる自由さえ私から

との関わりなど気にする必要性もなく、 の家がなんと言われようと関係はない。 りることなど出来るはずもない。 結果、 外 死 下

を睨み続けることしか出来なかった。 の瀬戸際を彷徨う私にはただ、この風景

だから私はあれが恨めしい。

私を置

てけぼりにして勝手に前へ進んで、 も有耶無耶にして平穏を歩み続ける彼等。 でもそれが私自身の逆恨みであること 何もか

を費やすのは、 は明白で、 無意味な憎悪に限りある生命 あまりにも愚かだ。

館

町

の住人たちにとって、ある種のシン

ばかりのこの街に、

古くからある異質な

に残していった唯一の遺産であるこの住 り合えない自分がいることも真実だった。 地主だったお父様が建てて、お金以外 しかし未練を捨てきれない、過去と折 これ以上彼女に無駄な時間を使わせたく はない。私は掛け布団をガサガサ鳴らし 「うん、ごめんなさい。そうするわ」

処。『意味のある』という意味で遺された、

沁みる塩水に目を目を窄めることの、ど 敵なことだろうか。日焼けに肌を掻いて、 れだけ不可能なことか。願わくばもう一

放されて、あの町で遊べたらどれだけ素 私のヨスガであり足枷。この束縛から解

に埋没した。

度 いや、これはやめよう。

が聞こえる。 控えめに開いた扉の先から、いつもの声 ですか。 「お嬢様。まだ起きていらっしゃったの 心配性な母親じみた声。 ―お体を大切にしないと」

て、大げさに包まった。

おやすみなさい。

浮きかけた足を落として、私はベッド

 $\begin{array}{c} 1 \\ \vdots \\ 1 \end{array}$ 

夏の雨ほど焦れったい物は無いと思う。

ないかって錯覚するぐらいのどしゃ降り。 じゃない。それはもう台風でも来たんじゃ りだした雨。しかも小雨なんて生易しい物 最初は通り雨だと見くびっていた人々も、 ついさっきまで晴れていた空から、急に降

とした画にはなるんじゃないだろうか。

くて恥ずかしくなってきた。

も滴るなんとやら。

馬鹿馬鹿

けだが

私は天を仰ぎ、

目に

雨粒を

慨深く

実際にはそれっぽくしただ

感

ろん、 んで、 雨は 今は しょ濡れで、まあこれはこれとしてちょっ で裸足になることは流石に無理だ。 まいたいが、 いて気色が悪い。いっそのこと脱いでし ニーカーや靴下は重く、そして纏わりつ 失いアスファルトを右往左往する水を踏 な私たちをあざ笑うかのように、 !瞬く間に街を覆っていく。 行き場を 雨に追わ ぐしょぐしょになってしまったス 傘など持ってないのだから上もび 小学生でもあるまいし公道 ħ て駆け回ってい る。 温 もち そん い豪 ない。 休むことも急ぐことも辛い現状に私は今 上げてしまう。ヘトヘトに成りつつも、こ どを走っただけで、私の体はすぐに音を だが、今の状態だとたった十メート ずなのに、 と 日という日を恨んでしまう。 のまま雨に打たれ続けるわけにもいかず、 い ああ、 < ° 知らず知らずの わりかし体力には自信があっ 走り始めてから五分ほどたっ なんて災難な日なんだろう。 一向に目 内に体 的 の場所は姿を見 力は 奪わ

たの

ル

ほ

たは

れ

いぐらいに勢いが強いシャワーを浴 大粒の雨を受け続けている に 受けてしまう。 私は恨もうにも恨めない自然の偉大さ ただ辟易とするだけだった。

びるように、

1 · 1. 11

肺に貯め込む。

席に向かった。

鐘の音に振り向く人々の視線を感じて、 の女の横に座ろうとした。

い。私は目の前の人間に会釈して、

長身

ぜここに、と皆聞きたがっている。だが 私は縮こまってしまう。 あんな小娘がな 結った長髪を靡かせながら、女は不満そ 「遅いぞ、玲華」

こんなときにこそ、堂々と立ち振る舞う を抜けて、私は張り詰める空気を目一杯 べきなのだ。開いたアンティーク調の扉 うに、あからさまな声で唸った。それに、 て、妨害してくる。 私が引こうとした椅子にわざと足を絡め

そしてわざとらしいほど大きな歩幅で、 かったんでしょ」 「冬姫がもっと早く時間設定してれば良

故意さえ感じる程に古臭く、落ち着きの 独特な匂いの充満する店内の雰囲気は、 頼者の眼前で、この先予測される痴態を 激しく、私に引くつもりはない。 ただ依

これは断じて私の責任ではない。

主張は

に不遜なのではないだろうか。まあ、 いぐらい大股を開いて闊歩する私は、 あるものだった。そんな中を、恥ずかし 席 逆 地の底にのめり込む 入の機会を失ってしまう。ここは互いに 晒せば、信用など地に落ちて ―せっかくの収 最悪

に到達した今、それを後悔する必要もな

譲歩して、私はひとまず席についた。

とは散々な仕打ちだろう。

はじめまして。私は御巫冬姫。

こっち

の目を盗んで抜け出してきたのに、

非難

Ξ

 $\vdash$ 

0) 前

で、

うすれば良いのか狼狽えているんだ。 達の不仲な場面を目撃してしまって、 な振る舞いを続けている。 いた。 私 0) 肩をすぼめて、 席の 前 に、 依頼者の女性 落ち着きのなさそう おそらく、 は座 って ど 私 日く と豪語するが、どう見ても不躾な人間 の て他人とは違うと高をくくっている勘 しか見えない。 女は誰にでもこんなスタンスで、 このほうが友好的に見えるだろう 或いは、 何事も斜に構え

ち合わせに指定された時間は午後の一時 識とずれているだけだ。 して悪いものではない。時折あっちが、 断っておくが、私とこの女の関係は、 私は学校だった。 わざわざ先生たち 今日だって、 待 常 決 題では、 人間に興味を向ける。 い 野郎、 小 何れにせよ、ここで深く掘り下げる話 が柄で、 ない。 か。 存在感の薄 私は切り替えて、 い人だ。 目

なものにはできるだろう。 ば、 かし整っている。少し血色を明るくすれ い カットとかなりの目の隈が相まって、 印象を与えがちな顔立ちをしている。 その薄幸さも洗い流して、 暗

私 は 「九条玲華です。よろしくです」(ことうれい) !頭を下げたが、冬姫は下げない。

は

ح 品 評はここまでにして、 私は彼女の言 1 · 1.

「それで、工藤さん―――」冬姫は率直

葉を待った。

が塞がっているのか。無意識でも意識し 聞きづらい声だ。小さすぎる。喉の半分 「工藤南です」

めたさに支配されていることは確実だっ ているにせよ、どこか抑えている気がす 隠し事、とまではいかないが、後ろ

を固定した。 「あの、話しても、良いですか?」

の目は酷く泳いでいる。 工藤は口を開かない。黙ってばかりで、そ に聞くつもりだ「―― 塵でも追いかけ 今日はどのよう なことなんですけど、私----わからないんですけど、その、あの、変 「えっと、その、何から言ったらいいか 赤ちゃん

なご用件で?」

ているのかと疑いたくなる。無駄な時間 貧乏ゆすりを高速で繰り返す私の足を、 私は苛立ちを覚える。 えそうな人間ではなかった。 礼かもしれないが、どう見ても子供を養 驚いた。彼女が経産婦だったなんて。 失

13

を消費することに、

思わず声に出てしまったが、工藤には聞 「イタッ」 冬姫はヒールの踵で踏んづけた。

こえていないだろう。耳元で囁かれる「お

となしくしていろ」の言葉通り、私はわ

ざとらしく背中を伸ばし、そのまま全身

「どうぞ、お構いなく」

を取られたんです」

家督相続問題に挿げ替えられるだけだ。

早々に失せた興味の欠落を埋めるよう

誘拐とは大抵、『神隠し』のことだ。それ 誘拐、 というわけですか」 と言うか」 いや、誘拐じゃないくて。

あ、

な、

なん

が私達二人の、いや依頼者も含めての共 「落ち着いて。 深呼吸でも」

仕事の大半を占めるもの。だったら、今 通認識だ。ありきたりではあるが、私達の 提案など端から聞く気もない。 工藤の口調は激しくなっていた。

ようと努力しているが、 言葉を、まだ辛うじて残る理性で選別し 時期決壊するの

溢れ出る

冬姫

の

拐犯や家族喧嘩から、『悪い』魔法使いや 原因が誘 は明白だった。 「赤ちゃん、お腹の中に、中にいたんで

だの仲直り、夜逃げ、家出……。

親子との感動の再会、惨たらしい別れ、た 回もつまらないものだ。これらの結末は、

私の子供。どこに、どこに言ったのかわ のに。消えたんですよ。お腹から。子供、 すよ。だから、そんなことあるはずない からなくて。でも痛くもなくて。 重くも

ない。 おかしいですよね?

が、 た矢先、 ああ、 二人の間に続いていた。 私の意識を強引に引き戻す会話 早く帰りたいな。 そう思ってい 簡単なストレッチをする。

私の手は遊び始める。

指を鳴らして、

をそのままに受け取れば、 私達は反応に困っていた。工藤の言葉 彼女は妊娠中

15 1 · 1.

想像……」

ろ突如として喪失した。 外傷も違和感もなく、自身の知らぬとこ に胎児を失くしたという。 しかも一切の もうって決めてた。検査もした。つわ のに。どうして、どうして……」 に、赤ちゃんがいた! もあった。決めてたのに。私の子どもな 嘘じゃない。産

特異な事例だ。冬姫もより慎重に事を

る可能性を求めるべきだ。それが私達二 運ぼうとする。こういった場合、あらゆ

人の教訓であり、彼女はそれに倣う。 想像妊娠、というものをご存知ですか?」

心身症なのですが 実際には妊娠していないにもかかわら 妊娠における兆候が現れる、 種の

「そんなはずない!」

机を叩く工藤。あからさまな怒り。 突然

剣幕に、私は思わず反応してしまう。 私は、私には いたんです。 絶対

> に机をどんどんと叩き続ける。工藤は ただ「どうして」を繰り返して、また並列

話は見込めない。周囲の目も集まりつつ はや壊れたスピーカーだ。これ以上の対

ある。このままいけば私達も店側も、 誰

も得しない。

持ち上げた。力なく垂れる工藤の体を、も はや引きずるように。泣き止むのも待た 冬姫と示し合わせて、 私は工藤の肩

彼女を出口に誘導する。

ずに、私は激しく上下する背中を抑えて、

外は相変わらずの雨で、分厚い雲に日

光はほとんど遮られていた。

青みがかっ

た影の中を進む。

途中、彼女の涙が、 私の腕になすりつ

けられる。

に増した粘度を持った雫。拭いたいが、手 気持ち悪い生ぬるさ。雨と同じ熱と、更

は塞がっている。

すのだろうか。

どうして彼女は、ここまで熱い涙を流

もはや疑うことは出来ないだろ

うと、 冬姫は言った。

に工藤を載せて、今日の仕事は終了した。 近くのパーキングに止められた、冬姫の車 こまでだ」 私は彼女を家に帰す。 玲華、 今日はこ

Interlude: Falling in

the sky (1)

ることができるヒトは、 妊娠期間の長い、離巣性の動物と考え しかし本来予想

される出産時期よりも早く産まれ落ちる。

定義し、生理的早産によって産まれた無 能な新生児を『子宮外の胎児』と呼んだ。 ポルトマンはこれを『生理的早産』と

1  $\mathbf{2}$ 

木道だ。完全な住宅街で、ここには消費し れかかって座り込む。背の低い建物の並 は日陰に逃げ落ちた。 私の皮膚を焼く日射に音を上げて、 ブロック塀にもた 私

 $1 \cdot 2.$ 

ほど静かで、 かない。だから、 動く日陰を見失えば、ここ 平日昼間の町中は驚く

の んら疑いようがないだろう。白い日差し は静止した時間の中だと言われても、な 中途半端に漂白されて、惜しいとこ

ろまで純白に近づいた灰色の世界。 そろそろ出席日数を考えはじめないと。

にしてこんな時間帯を指定され、また私

再開させるなんて。しかも、ひと目を気 先日の面談の続きを、まさか彼女の家で

それは無理なことだろう。人であるのな は無断欠席する羽目になってしまった。 ただあのままで放置できるかというと、

今頃は

正直、

初対面はただのヒステリー女か

は無理だ。

ずっと塞ぎ込んで、 その後の話を冬姫から聞いた。

呼吸すら徒に疲れ

工

藤

は

誘うだけだったという。 彼女は相当な精神力を消費して、

あの

自らに降り掛かった何らかの災難によっ 場にまで出向いていた。工藤はここ最近、

て、もはや日常生活を正常に営めない状

べるものもなく。餓死の寸前に近所の住 態にあるという。 人に助けられたという。 一日中引きこもって、 それがなけれ 食

はならない。 と思っていたが、 その認識は改めなくて

この熱さが落ち着いたら行こう。

顔でどうやって日常に戻れるだろうか。私

17

後の手段だ

を無視して、

何食わぬ

彼女の錯乱

―助けを求める最

女性の声だった。

瞬顔が地面に向いた間に、おそらく

「手伝いましょうか?」

待ち合わせは正午きっかり。

そろそろ立ち上がろう。

に食い込むアスファルトの痛み。体重が私はそう思って腰を上げようとする。手

憶する。だがその一連の流れを断ち切っさらに境界を変形させて、凸凹な痕を記

て、私に話しかける誰かが目の前にいた。

「ありがとうございます」んで私の背を押してくれる。

しゃが

「いえいえ」

女の顔は、心理の奥深くに刻まれた、

ている。強制的にそう感じさせられる彼微笑む顔に、私は目を奪われた。完成され

て、彼女を面妖な女性に昇華させている。い濡鴉の髪が、彼女の幼稚さを引き締め件的な好意は、まるで子どもだ。だが長遍的なものに依拠しているはずだ。無条

、 : 頁 : : : げい引った、ななでほごでして人間なら尚更にだ。 でかない人間はいない。それが特に美麗ない だが見知らぬ人間に話しかけられて、驚して親切に手を貸そうとしてくれている。彼女は私の前を通りかかったのだろう。そ

ふと顔を上げて見ると、 私は不意を疲 白いワンポースとつばの広い帽子も、

私

「ああ、ごめんなさい。そんなつもりは

れたように尻もちをついてしまった。

なかったの」
「ああ、ごめんなさい。そんなつも

19  $1 \cdot 2.$ 

> りで、全体的に長く痩せ細っている。例 ただ気になるのは、彼女の腕や胴、 より少し大きな身長によく似合っている。 首周 思案は、私の悪い癖の一つだ。 特徴もない。 彼女は私をどう思うのだろうか。この

外はその胸だろうが、それでもこの日差

しの中の真っ白すぎる肌は、不健康さを 道に戻りたいのだが。 願わくばこのまま別れて、また互いの

が私の彼女に対する第一印象だ。 醸し出していた。夏至の雪だるま。それ いないらしい。

----どうやら彼女は、それを望んで

飾るつもりもないし、最低限のもので十 は黒地のシャツに白のショートパンツ。着 その逆を計るとどうだろう。私の格好 かがかしら?」 れど、良かったら、お茶でもご一緒にい 「なんだか、こんなこと言うのも変だけ

服は大して判断材料にはならないだろう。 分だ。素朴な人間だろうか。少なくとも いか。 おいおい、かなり踏み込んできたじゃな

分で言うのもなんだが、顔はそこまで悪 で、左耳を隠すようなショートボブだ。自 本心は断りたがっているが、ここで拒否

「ああ、それは……良いですね」

できるほどの勇気もない。

それに、私の返事にうきうきな彼女を

くはない。整っているが、これと言って

だとすれば顔だ。髪型はアシンメトリー

はずだ。

こうなると、

心に落ち着きが戻ってく

い

つの間にか惹かれている。

仕方なく私は目を建物に向ける。

まあ、

## $rac{1}{3}$

費できるほどある。それに彼女がここを 近くに、工藤の住むマンションがあった 選んでくれてよかった。 だいま十時十七分。 と、私は正確な時間を知った。現在時刻た いて、駅前のカフェに入った。そこでやっ に待ち合わせをしようというのだろうか。 がついた。これでどうやって、時間通り 見ても、そこまで悪くはなかった。 彼女と出会った後、私達二人は少し歩 時計を忘れていたことに、いまさら気 時間的な余裕は、 たしかこの駅の 浪 は、 たない影。 なのに、それら全てを統合した彼女自体 う考えても、 うな餌が、勝手に転がり込んでくる。 一つ一つの引力は、常人のそれではない。 い 意識の蟻地獄。彼女はただそこに居れば んだ黒目は、永遠と深い孔を連想させる。 い合う彼女とは目も合わせられない。 な性格の表れだろう。その証拠に、 だ。これも私の悪い癖、というよりか臆病 態度を取れるようになる。 る。 い。 性質が真逆で儚い陽炎だ。質量を持 初対面( 後は、あの清廉さに抗えない私のよ の人間に対しても、それなりの 本当に不思議な人間で、 彼女の体を構成するパーツ 調子に乗るの 私は 向

澄

21 1 · 3.

> ありきたりなデザインで、いかにもな建 付き合ってもらってるんだから。これは、 私の気持ち。遠慮しないで」

ものだった。 築だった。ただ前面がガラス張りになっ えば、店内のプライバシーはないような ていて、外の景色がよく見える。逆に言 居るなんて、私は勝手に感動する。 今どきこんなにも純粋な心を持つ人間 過ぎて逆に心配になってしまう。私がも

「何か好きなものでも選んで」

メニューを差し出され、私は自然と受け

食べてみようか。ここまで決まってやっ と思った。後は、フレンチトーストでも

ぽかしたことに気がついた。

と、私は遠慮するというプロセスをすっ

「その、お金は別に自分で払います……

よ? そんな事言わないで。私がお願いして

に見える。結局私はコーラを注文しよう 取る。いろいろあるが、どれも同じよう ろう。 ねてやろうと下心を丸出しにしているだ し悪い人間だったら、もう何万円かくす 「じゃあ、これで」

を述べて次に進む。彼女は直前まで何も 注文した。かしこまりました、と定型文

決まっていなかったようだ。

私はメニューの写真を指さして、店員に

いかしら?」 「あら、美味しそう。私もそれ頼んでい

「どうぞどうぞ」

それでは二つ、でよろしいでしょうか?」 「はい」 私は異物だと言うことだ。だがわからな くもない。自分の近所を通る人間の、

はい、以上で」 「以上でよろしいでしょうか」

間 それから私達は料理が運ばれるまでの 互いの虫食いパズルを埋めようと努

「ご注文ご確認ください

いだろう。

力し始めた。

いらっしゃったの? 「失礼かもしれないけれど、どちらから あまり見覚えの

て ない顔だったから、つい、話しかけちゃっ

彼女の質問に、 やっぱり。 まあ隣の隣街、 何だか雰囲気が違うもの」 私はありのまま答えた。 ぐらいですかねえ」

> 染んでいるか不馴れであるかは、 の確率で部外者を選別できる。 経験則と かなり

馴

はこういうものだろう。 「やっぱり分かるものなんですね」 ――そう。この町の人は、みんな貴

確かに、道端で座り込む人間はそういな 女みたいに大胆じゃないから」

「でも地面に座るなんて。私には絶対で

「あれは、ちょっと疲れてて」

きない」

らそう言っているのだろう。一種の羨ま それは見下しているのではなく、 本心か

しさすら感じる口調だ。

てました」 に帰ったり、泥だらけで家の中走り回っ 小さい頃とかは、よく公園から裸足で家 わけでもなさそうだ。むしろ解放された ているが、しかし極端に不自由といった ように、生き生きとしている。

「あら、活発。良いわね。羨ましい」

「羨むようなことでもないですよ、全然」

たの。今でも、歩くので精一杯」「私ね、体が弱くって、外に出られなかっ

ほうが失礼だろう。

ら、特に気遣うこともないし、逆にその

なんとなく察していたことだった。だか

ていつも思ってた」「―――貴女みたいに、元気だったらっ

あまりその意図はなかったのだが、彼女「ふふ、そうね。痛いのは御免ね」「走り回って怪我するよりはマシですよ」

は笑ってくれた。彼女は身の弱さを嘆い

ノンチトーストL次み勿が重ばれて。F「お待たせいたしました、こちら―――

れに匂いもいい。バターの匂いだ。本能真で見るより、案外いい色味だった。そフレンチトーストと飲み物が運ばれた。写

「美味しそうね。貴女と同じにして正解

に訴える油脂の誘惑。

「ありがとうございます」だった」

たものを持っている。特に彼女のものは鱗。やはり女性は多かれ少なかれそういっ然とそう出た。母親みたいだ。母性の片なんだか褒められた気分になったから、自

期待以上だった。

意されたい欲求が高まる。「めっ」という 意されたい欲求が高まる。「めっ」という 代草は、きっと彼女によく似合う。だが それは妄想に抑えておくべきだ。いくら なんでも、気持ち悪すぎる。 「どうしたの、食べないの?」 「ら、言った傍からこれだ。 「食べますよ。食べます」 いただきます。と教えられたての子ども のように、私は元気よく言った。